

72 南蛮貿易と漆器（2021年7月15日）

ギメ東洋美術館の日本美術の展示スペースで、大きくて見事な装飾が施された箱を見つけました。なぜ、海賊の宝箱が日本美術コーナーに展示されているのかしら？と不思議に思いましたが、よく見ると「coffre Nanban」（直訳すると「南蛮の箱」）と書かれています。これは、16世紀半ばから17世紀前半までの間、ポ



ルトガルやスペインの商人が日本に来航して行われた南蛮貿易によって、日本からヨーロッパへもたされた漆器の一つです。日本語では、「洋櫃（ようびつ）」と呼ばれています。蒔絵（漆で文字や図柄を描いて、漆が乾かないうちに金粉や銀粉を蒔いて定着させる技法）や螺鈿（貝殻の光沢のある部分を表面にはめ込む技法）がふんだんに使われた贅沢な品です。

同じ場所で、もう一つ珍しいものを見つけました。日本人には観音開きの仏壇のように見えますが、よく見ると中央には天使や聖女が描かれています。これは、持ち運びできるキリスト教の祭壇です。日本語では、「聖龕（せいがん）」と言います。



これらの洋櫃や聖龕は、前回ご紹介した日仏合作のリキュールセットの入れ物（<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100210286.pdf>）と同様に、日本からヨーロッパへの輸出用に作られたものです。南蛮貿易では、ポルトガルやスペインの商人は、中国産の生糸と絹織物や本国から持ってきた鉄砲を日本で売り、日本の漆器や銀などを買って帰りました。南蛮貿易は、商品だけではなくキリスト教も日本にもたらしました。洋櫃や聖龕は、日本で布教活動をしたイエズス会の宣教師たちが注文して持ち帰ったものだと考えられています。

ヨーロッパに渡った漆器をいくつも見て、ヨーロッパ人のアレンジによって

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

漆器の可能性が広がったことが分かりました。